

# ロシア語テキストにおける動詞のモダリティ機能

榎 尾 頌 子

## Modal functionality of verbs in Russian text

Shouko KASHIO

### はじめに

ロシア語モダリティとは、情報に対する、情報送り手の主観的・主体的な判断評価の表現である（参照：1999・1988・1996・アカデミヤ文法82）。モダリティ機能分析の目的は、主として、テキストや情報の伝わり方、テキストの真の理解、情報伝達意図の理解に近づくための手段として役立つためになされる。

種々のモダリティ表現（動詞アスペクト・助詞・法・専用の挿入的モダリティ表現など）が存在する。小論は、主としてロシア語モダリティ機能の一端を占める動詞モダリティ機能について分析を試みる。モダリティは、文の叙述表現に集中して現れることが多く、叙述表現の中でも、動詞アスペクトは形容詞や名詞などの叙述表現と異なり、状態の発生・継続・完了、結果継続、出来事間の前後関係（因果関係/接続機能/前提/背景/新たな出来事の焦点化/視点移動/視点の重層化/場面交替/テキストの部分的統括）などの機能を担っている（榎尾2000）。こうした動詞アスペクト機能については、1960年代以降から現在に至るまで活発に多くの研究がなされてきている（1968・磯谷1977・佐藤1982・1996・原1996・三谷2001等）。一方では、ロシア語学においてモダリティという文法カテゴリが存在するが、モダリティとアスペクトとはどういう関係にあるのか。小論では、このアスペクト機能をテキスト全体の中の「モダリティ機能の一環」に位置づけ、アスペクト自身がどのようにして情報送り手の伝達意図 モダリティ 機能の補完をし、また、どのような限界性をもつか、できるだけテキスト全体の中で分析を試みる<sup>注1</sup>。

## ロシア語モダリティの意味

### (1) 動詞のアスペクトによるモダリティ表現

話し手・書き手は自分の伝達したい気持ちを相手（聞き手・読み手）に伝達する際に、動詞の語彙の選択だけではなく、動詞のアスペクト形態を選択しながら伝達していく。その意味で、話し手・書き手の主観（体）的判断によって選択されたテキスト内のロシア語動詞のアスペクト形態には話し手・書き手のモダリティがある程度反映していると言える（その場合、相手・聞き手・読み手などの外的状況も視野に入れてアスペクトや語彙が選択されることが普通である）。

（2002年10月モスクワの劇場占拠人質事件の最中に、劇場前で一人の女性が叫んだ言葉 2002年11月/日本/TBS放映）

（どうかあなたがたの紛争はそっちで勝手に（ご自由に）解決すればいい、でも子供たちは解放してちょうだい！）話し手は、不完了アスペクト で話し手の放任・解決に対する距離を置いた心理状態・自身の切実な問題として向き合っていない心理を反映させ、完了アスペクト で子供の解放の実現への切実な関心・気持ちの上での関わり・強い関係性を表現している。話し手の心的状態がそうさせている。これも話し手のモダリティ（心的状態）がそうさせている。

（モスクワ劇場占拠人質事件が一応の解決をみた後のプーチン大統領の発話、2002年11月/ロシアTV/ ）

（我々は不可能な事を成し遂げた）。

首尾よく・うまく行われた、成功裡に終わる、というモダリティを出すために、 + 完了アスペクトが選択されている。この場合も話し手は、聞き手が話し手とは対立する立場にいることを考慮する場合は、このモダリティ表現は用いないこともあり得る。

.. :- ... ....  
? ....と不完了アスペクト選択だが、8段落では、  
... ..  
..（ .1975 . 太字小論筆者）。不完了、完了の交替が、テキストの基本テンクスである”今の時点から距離をおく機能”と、テキストの”今の出来事と関係を持たせる機能”（因果関係とその結果存続の心理状態）の差を出している。こうしたアスペクトの使われ方（意味に応じてアスペクト形態が話し手によって選択されるという指摘）に関する研究は行われてきている（磯谷1977・原1996・三谷2001）。小論では、アスペクトを、テキスト全体の中でのモダリティ機能の下位的要素の一つに位置づける。



人物、出来事としての事実などが客観的モダリティになることが多い。

イ) 主観的モダリティ

\_\_\_\_\_? (これが事実の全てだ。極めて単純な事件に見える。しかし、それにもかかわ  
らず、この事件にはかなり不可解な点が含まれているのではないだろうか)(ドストエフスキー  
「単純な、だが裏事情を読み解く必要がある事件」、資料添付)

(完了アスペクト)? \_\_\_\_\_?

(不完了アスペクト = 存在を示す) \_\_\_\_\_!

(本当に、今、判決を軽減するわけにはいかないものだろうか。本当に、どうしてもだめだろうか。実際、これには誤審があったかもしれないのだ..。いや、どうも誤審だ、という気がしてならないのだ!)。太字部分が一般的に主観(体)的モダリティ表現とされる(アカデミア文法82)。小論では、モダリティ機能は言語形式だけではなく文脈によって制約を受けることが大きい、と考える。モダリティ機能の分析は、アスペクトの意味分析のときと同様に(樫尾2000) 文脈はもちろん、部分的文脈だけでは足りず、テキスト全体の中で行う必要があるのではないかと、という観点から分析を試みる。

### テキストにおけるモダリティ表現

#### (1) 明示的モダリティ形式の機能と非明示的モダリティの機能

客観的事実に対して自分はどうか考えるか、という主観(体)的評価・判断がなされる場合、それが明示的な言語形式で表現される場合と非明示的な場合とがある。後者は、接続表現、接続方法や文脈から制約を受けるモダリティの意味である。前者の明示的な言語形式はモダリティが見出しやすいが、後者の接続詞、接続表現、接続方法をモダリティ機能とすることは、議論の分かれるところである。これらの要素とモダリティ機能との関連性を見ていく。

#### (2) テキストの主要な情報伝達意図(メッセージ)と接続表現

邑本(2001「文章の要約」)では、一般的に、文章の要約に関して、キンチュとダイクの情報縮訳規則として3つのマクロ規則が紹介されている。削除(必要のない命題を除く)、一般化(同じ上位概念をもつ複数の命題群をその上位概念に置き換える)、構成(一連の命題群をそれらによって意味される別の命題に置き換える)とされる(邑本2001)。要約は、書き手の主要な伝達意図を取り出すためにも有効な手段である。小論では、佐久間(2002)の次の規定が、ロシア語テキストのモダリティ考察、特に、接続表現に有効であると考えられる。接続表現は、「前件と後件を論理的に関係づけて、結び付け、切り変え(略)、文章・談話の全体的構造やその成分としての段(略)のまとまりのしくみを作り上げる外的な統括機能を持ち(略)、情報伝達の意図やあり方を実現し(略)送り手の主体的な情報伝達のあり方を決定する」(「」は、佐久間2002接続詞・指示詞と文

連鎖）、「送り手の主体的な情報伝達のあり方を決定する」機能を持つ、という意味において、テキストの文脈展開に關与するモダリティ機能と重なると考えられる。これは広義のロシア語テキストのモダリティ機能である。

### 文脈展開や主要な伝達意図（メッセージ）に關与するモダリティ表現

#### (1) アスペクトによる接続（文脈展開）機能 童話のテキスト例

佐藤（1982）では、「ロシア語を含むスラブ語（略）では、印欧語の中でも例外的にアスペクトの区別が動詞の意味的・文法的範疇として発達している。（略）アスペクトの区別がこのように体系化している例は他の言語では全く見出されない。」と分析されている。この指摘は、テキストにおけるロシア語動詞のアスペクト形態が、アスペクトだけではなく、モダリティとの関係性においても、テキストレベルにおける各種の機能（情報送り手の主体的評価（モダリティ）・テキストの文脈展開機能としての接続機能・その他）を、他の言語にはあまり見られないほどより明示的に形態的に持っていることを語っていると思われる。

ロシアの民話をA・トルストイが児童向けに再話した『大きなかぶ』<sup>注2</sup>は、日本でも児童向けに数多く翻訳されている。今回、6人の翻訳者の日本語訳を見た（訳者がA・トルストイのどの原書を元にしたかは明らかではないが、ひとつの傾向を示していると思われる）。ロシア語テキストでは、完了アスペクト+語順が不可能性のモダリティを明示的に強く出している（        ）、日本語テキストでは、ロシア語のもつ完了アスペクトが日本語のリズミカルな響きやモダリティ性として豊かに移し変えられている。児童向けに編集されたA・トルストイのテキストでは接続詞は全く使われていない。一方、どの日本語翻訳にも共通してさまざまな接続表現が出現している。また、なかなかなかぶをぬくことができないという「一生懸命さ、動きや不可能性」というモダリティを強く出すためにロシア語テキストでは完了アスペクトの過去の否定形のみで表現しているが、日本語訳では「一生懸命さ、動きや不可能性」のモダリティを感じさせるために擬態的表現の反復も多く出現している。ロシア語では、動詞のアスペクト形態が明示的に完了や非完了性、継続性を示す機能が比較的強いために童話のような単純な語りの中ではわざわざ接続表現を用いなくても、動詞と動詞の関係性だけで潜在的・非明示的に接続関係・論理的关系性の機能を担う事も多い。一方、日本語では接続表現や擬態語が共通してふんだんに補われている。日本語の場合は、出現全総数では、ところが3、けれども3、それでも9、やっぱり5、とうとう2、したのですが、どうにも、まだまだ3、やっと2、どうしても、よいしょ うんしょ。なかなかなか（ぬけないぞ。）ハラヨー エンコーラヤーショ。ソラヨー エンコーラショー。でも それっ うんとこしょ！あ どっこいしょ！ ぐいぐいと（ひっぱりました。）（ふたりが力をあわせても かぶは）びくとも（うごきません。）じめんにあしをふんばると 力いっばい（かぶをひっぱりました。）なぜなら ふとみると ばひょ～んんん！（（略）じめんからぬけたのです。）など<sup>注3、注4</sup>。





ある。題名は、“最初の肯定( )+逆接表現( )で自己の主張”を接続する構造の文である。これと同一構造(最初は肯定、次に逆接でつなく)がこのテキストの場合、全体を貫き、「情報伝達の意図のあり方を実現」(佐久間2002)する文脈展開を作り、主題へと導いて行く。は、数段階の逆接(ロシア国民は散文的で出来事に詩を感じとれない、しかし、この事件や女性被告がすばらしい小説のテーマになりえると小説の執筆を促したあとで、さらに、しかし、現在の小説家たちが本質を見る目がないことを非難している)を重ねながら、冒頭部から述べてきたことを結尾部(段落)へつなぐための逆接機能を果たしていると考えられる。

一方、A. 具体的な 事件( , 冒頭/終了部, 終了部, 冒頭, の各段落)と、B. ロシアの一般的裁判事情批判、社会文化時評( 冒頭/接続部, 冒頭/継続部, 終了部, 冒頭/終了部の各段落)とが、逆接手法で接続しながら交互に出現している。C. として、この当該テキストの枠を超えた、別のテキストとの関係づけも見られる( 冒頭... ..) B A ,A B ,A Cへとつなぐために、接続表現/不完了, 完了アスペクトの有無が見られる。段落冒頭近くの , .. (原文イタリック体)は、小論では、書き手の皮肉な、逆説的、反語的論法(つまり、この事件を単純に見るのではなく、裏にある事情を解明すべき、という書き手のモダリティ表現)で、 と同義的機能と考えるが、別の解釈もある(参照:小沼1980)。このテキスト全体を貫く基本構造を暗示するのが、段落の - である。後続の“一度肯定してから逆接する手法”のための伏線機能も担っていると言える。

段落で \_\_\_\_\_ ...のように \_\_\_\_\_ + 不完了アスペクト過去形で、過去からテキストの基本テンスである現在に至るまで継続してきている陪審員や裁判所のセンチメンタリズム・本質を見ない対応を批判している(和訳は..シテキタ形が過去から現在に至るまでの一般的に見られる継続・反復の意味を表現する) \_\_\_\_\_ で表現されるテンスは、段落末の \_\_\_\_\_ , \_\_\_\_\_ , \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_ までの機能領域を有する。この後、不完了アスペクト過去形や現在形が連続するが、この \_\_\_\_\_ を含む不完了アスペクト過去形文は、数十行あとの \_\_\_\_\_ (原文イタリック体)

\_\_\_\_\_ という現在表現と意味的に同一のことを表現しており、 \_\_\_\_\_ と \_\_\_\_\_ が相関関係を成すことによって、一般的に現在まで継続して過ちを修正してきていない、という批判のモダリティ機能をより明確に果たしている。 \_\_\_\_\_ + 不完了アスペクト過去形の文と

同様に、再び、不完了アスペクト過去形( \_\_\_\_\_ , \_\_\_\_\_ , \_\_\_\_\_ )で従来の、一般的に行われているお情けの判決を批判したうえで、再々々度、逆接の接続方法「ところがどうだろう( \_\_\_\_\_ )」で、今の具体的・個別的な事件へと接続している。前件では不完了アスペクト過去形の連続であったのが、ここで、状態の生起が完了アスペクト \_\_\_\_\_ , \_\_\_\_\_

で表現されている。この完了アスペクトは過去形によって現在における結果存続を示すことができるため、テキストの基本テンスである現在と結びつき、書き手が現在問題にしているのだというモダ

リティ(A)へとつながる。辞書形は、実現希望を志向している。 ; ... 段落末尾に被告女性を弁護すべき根拠として書き手は を挙げ、その判断という推測モダリティを付加して表現している。 はこの 段落冒頭部分では客観的事実、客観的モダリティで提示していたが、同じ が段落末では、主観的モダリティ機能を果たしている( 段落で再び“妊娠していなかったら”同一のことが実際にはありえなかったであろう と、非現実のモダリティを反復することで、最後の段落( )のメッセージ 被告女性の刑軽減できないか に向けて文脈展開を強めていく。それにつれて書き手の主観的モダリティ表現もしだいに強まっていく。) 段落冒頭部分で初出した を、同段落末尾で再度出現させてここで初めて、結尾部における書き手の最終的メッセージのための「根拠付け」に位置づけている( ... )。 +完了アスペクト辞書形は、この文脈では非現実の意味における「希望・べきだろう」の意味( の文は、文脈制約により非現実の意味における「仮定や推測」の意味になることもある)になり、モダリティ機能=書き手の主張を表している。この主張表現は、テキスト結尾部にいくと、より強いモダリティ表現になっている(後述)。

段落で妊婦の心理状態に関する他の例や一般的な事例に対するモダリティ(B)が続き、 段落末尾で話題にしている具体例の被告に対する推測のモダリティ(A)が続き( 段落末尾 ... .. )。(原文イタリック体)。

で書き手が読み手に対して賛同を促す命令法によるモダリティ表現、および、推測/仮定に後続して書き手の主観的断定・評価モダリティを 段落末尾に置いている( 段落末尾 . 断定)。それに対する読み手の反駁も視野に入れながら( ..

... .. )モダリティ表現を付加して書き手の主張をしている( ,

、 )。段落冒頭では、同じ非現実の仮定法だが、単なる推測ではなく、もし、被告を無罪にしようとするれば、何かしら刑軽減に役立つことができたはずだ、という、具体的な事件に対する陪審員を責めるニュアンスの主観的モダリティ(A)を打ち出している。これは、 段落で、一般的に今まで安易に犯罪者にお情けの無罪を主張してきた陪審員を批判していたモダリティ表現(B)と逆の論法である。 , ...。

この完了アスペクト で具体的な結果到達のモダリティ(A)を表し、一方、不完了アスペクト( 段落継続部)で一般的現象に対する断定モダリティ(B)を示している。

段落は、被告女性が監獄産院で出産しても、家族との別れにおいても極めて散文的、平凡にことが行われるものであるとして、推測の主観的モダリティ表現になっている( 4回、

3回と反復し、不完了アスペクト未来形や完了アスペクト未来形の両方、および、1回

の動作を完了アスペクト未来形で表現)。ロシアの国民がこのように散文的なのでこの国には決して詩は生まれてこない、と完了アスペクト未来形で、一般的な現状に対する断定モダリティ(B)を示している。ここで散文的、平凡なことと詩とが対立関係として書かれている。これに対する後件として、  
 !という表現は、一見して逆接表現ではないが、前件(ロシアの国民は世界で最も詩的ではなく、散文的である、という断定に近い表現)とは相反する内容を後件でつなげているため、文脈では逆接の機能として働いている。このように、言語形式だけではなく、文脈における接続の相互関係のなかで、意味・機能が出てくることがあると考えられるため、機能分析には丸ごとのテキストが必要である。

#### ウ) 主要伝達意図のモダリティ表現

このテキストの書き手は、ロシアの文学者からは詩は生まれないとってはみたが、ものすごい情熱、すさまじい復讐、堂々と実行にうつしたこの被告女性は最高の洞察力をそなえた小説のモデルになれる、として、ロシアの作家たちに小説を書く題材が眼前にあるにもかかわらず  
 !と、具体的事件に対するモダリティ(A)を表しながら、同時に、ロシアの作家一般に対する批判のモダリティ(B)を展開している。言語形式は、一見して呼びかけのように見える。しかし、表現は単純な呼びかけではなく、非現実のモダリティ表現

! および、次の段落の現状認識?との文間の相関関係から、モダリティ表現の意味・機能が出てくると考えられる。“こんないい題材があるのに、書こうとはしない この女性の行動をきちんと評価しない” 果たして、本当にこの被告女性に対する判決を軽減できないのだろうか?という現状を認識し、批判・軽減すべきとのメッセージを反復して終わっている。こうしたテキストの文間の相関関係からモダリティの意味が出てくる。”できないだろうか”、という不可能性のモダリティを出すために完了アスペクトを使用している

(完了アスペクト)。次に、段落の結尾部において、  
 (完了アスペクト)? ? (不完了アスペクト=存在を示す) ! 各文にすべてモダリティ表現がある。最後の文のは語彙自体が推測を示す。そういう語彙を最後に書き手が選択したという意味でも、書き手のモダリティと関わっている。この段落は、明確なモダリティ表現( ?.. ?.

!で締めくくっている。気がしてならない、という表現が付いてはいるが、テキスト冒頭部で -

と断定を避ける表現で始めながら、テキスト結尾部の最終段落で.. 誤り・誤審、という語彙さえ選択しているのは、女性が理由あって(と書き手が主観的に判断している)罪を犯し

た女性（乳飲み子を持つ）を、シベリア送りにさせないで罪を軽減させてあげたいという書き手の意図、モダリティ - ？があるからである。従って、  
 は、具体的事件に対する書き手の強いモダリティ表現（A）のひとつとして機能している。と同時に、裁判の一般的現状に対する批判も文脈からうかがえる、と言える。また、この文には 「疑問・不満・驚き」を意味する（研究社ロシア語辞典）語を更に文頭に重ねている。これは、“軽減できないものだろうか”というモダリティだけではなく、“軽減しないなんてばかなことあるのか”という「驚き・疑問・不満」を強く加味したモダリティ表現なのである。この文と 誤り・誤審、という語彙とは相関関係にある。更に、後続文で「驚き・疑問・不満」の助詞 を反復し、更に後続文で を反復出現させ、「！」で締め括っている。これは明示的な言語形式によるモダリティ 書き手の評価・判断・意図 の表現である。更に、個々の単語だけではなくこの段落全体がモダリティ表現であり、テキスト全体を統括する段（佐久間1995）と考えられる。

テキスト全体の内容と文章構造（最初は肯定してから逆接で接続）は、題名の ,  
 ）に凝縮している。さらに、テキスト全体を統括する段（佐久間1995）（書き手が最も言いたいこと・メッセージ：結尾部）は、テキストの題名 ,  
 の中の に凝縮している。題名の中の と の対立関係は、  
 という語彙的対立に相当する。前者 が、事件を単純に見ること . （段落冒頭付近）/  
 / （段落）  
 に相当し、後者 は、 や、この事件には妊婦の心理状態という原因がある（  
 ... .. , 段落末尾付近）刑軽減のために綿密で本質を見抜いた分析が必要である（  
 ,  
 段落冒頭付近）、女性被告がすばらしい小説のテーマになりえるという判断評価（  
 ,  
 .  
 ...  
 段落中間）などに対応している。こうして、同義的モダリティ(A)のネットワークが随所に配置され、反復 強調効果を生んでいる。従って、題名の , は、“やっかいな事件”  
 （小沼1980）であり、“謎めいた事件.. 段落冒頭付近/イタリック体原文”であり、“不可思議な .. .”、“解明し尽くされていない事件  
 段落冒頭”であり、“裏事情を解明する必要がある事件.. 段落冒頭付近”であり、“被告の刑軽減を考慮する必要がある事件.. .... 段落冒頭付近、  
 .. ..?結尾部”という、書き手のモダリティ（A）内容を一語に



力のあるモダリティ機能（個人的考えの吐露）を果たしている場合（-(2)-イ：段落末尾の部分）も見られるが、多くは、他の表現と協同しながらテキストのモダリティ機能を果たしていると考えられる。例として挙げたモダリティ言語形式が、常にどのテキストにおいてもそれと同じモダリティ機能を持つわけではない。接続表現・他のモダリティ表現・アスペクト・指示表現・その他と相関関係を結びながら、文脈からの制約を受けていく。また、モダリティ表現を使用している情報送り手が必ずしも自身の主観（体）的判断・評価・意図を意識しているわけではなく、文脈によって結果として情報伝達者の意図の表現として機能することもある。「送り手」による情報伝達・情報の送り方・評価・解釈と、「受け手」による情報の理解・解釈・評価は、密接に関連があり、伝達機能やモダリティ機能理解の面において相補的なものであろう。その他、送り手が重要と考えていることを受け手が特に重視せず、送り手が付け足的に解釈して述べていることがらを、送り手が主体的に個人として重要な情報伝達として採ることもよくあることである。送り手が意図してそれにふさわしいと考えた言語形式を用いても、その意図とは異なる理解や誤解を、受け手がすることもある。テキストを読む目的が、単に知識獲得や正確な理解だけではなく、「楽しみであったり、感情的な共感を求める」（邑本2001。）ことも多いことも指摘されているなど、私たちが情報に向かう態度はさまざまである。従って、ドストエフスキー（添付資料）の意図の受け取り方は、読者によって異なるが、小論では、テキストにおける情報送り手の主体的判断・評価を中心に試みた。

従来、モダリティ言語形式としては明確に位置づけられてはこなかった、しかし、モダリティの規定にあてはまる表現 情報に対する送り手の主体的な評価・判断 については、広くモダリティ表現に入るのではないかと考える。こうした広義のモダリティ表現が、佐久間（2002）によって行われた接続表現と指示詞の文章・談話における機能規定と、一定の関係性を持つのではないかと、この仮説を試みた。テキストの真の理解ということは、単にモダリティ機能を見るだけでは足りない。短い数行のエッセイの理解においてさえその作者が今までに他所で書いてきた・言ってきた膨大な作品全体像の中に短編の当該テキストを置いて作者による単語や表現の選択の持つ意味の軽重を判断する必要が生じることもある。また、送り手がどういう情報意図をもって発信しているかについて、受け手（読み手・聞き手）も、主体的に理解していくとするなら、受け手のモダリティ（主体的受け方）も考えられる。その際、例えば、テキストの文体分析が決定的に必要なこともある。<sup>注8</sup>

モダリティは、ロシア語を母語とする情報送り手（書き手／話し手）の主体（観）的判断評価のために、その生きた表現を膚で感じ取るという理解において日本人としての限界に突き当たる危険性を孕む。それだけに、ロシア語母語者が必ずしも必要としない客観的な文章構造／文脈展開の接続表現のモダリティ分析が、語彙研究とともに必要ではないか。

小論ではモダリティ表現全体の分析ではなく動詞が主なため、過渡的な分析に止まっている。先行研究に学びながら、今後は、その他のモダリティ表現、および、語順とモダリティ表現との関係、段落とは異なる意味のまとまりを形成している「段」（佐久間1995・2000・2002）を視野に入れた

ロシア語テキストにおけるモダリティ表現をさぐることを課題としたい。

(かしお しょうこ・本学非常勤講師)

【注】

注1) 小論では、テキストを、文章と同義に使用している。引用資料テキストの下線、太字は全て小論筆者による。

注2) A .トルストイ再話テキスト。( )内は小論筆者): (完了過去) .  
 (完了過去) (始発の完了過去)  
 (不完了辞書形、一定方向を示す定動詞): (動詞不完了現在) 、(完了未  
 来形で過去の反復表現) (完了) ( possibleの動詞現在、否定助詞で不可能性;  
 語順で不可能性を強調) (完了過去) (“つかまる”という動詞の省略)  
 (不完了現在)- (完了未来形で過去の反復表  
 現) (完了の辞書形) ( possibleの動詞現在、否定助詞で不可能性) (完  
 了過去)  
 (“つかまる”という動詞の省略)  
 (不完了現在)- (完了未来形で過去の反復表現),  
 (完了の辞書形) ( possibleの動詞現在、否定助詞で不可能性) (完了過去)  
 (“つかまる”という動詞の省略)  
 (不完了現在)- (完了未来形で過去の反復表現),  
 (完了の辞書形) ( possibleの動詞現在、否定助詞で不可能性) (完了過  
 去)  
 (“つかまる”という動詞の省略)  
 (不完了現在)-  
 (完了未来形で過去の反復表現) (完了の辞書形) ( possibleの動詞現在、否定助  
 詞で不可能性) (完過去了) (“つかまる”という動詞の省略)  
 (不完了現在)- (完了未来形で過去の反復表現)  
 (完了過去、結果到達) !(拡大文字は原文による)

注3) 各本別に見ると(五十音順)(内は、出現頻度)借成社 よっこらしよと(ひっぱりました。)1、  
 ところが、ひっぱりても ひっぱりても5、ひっぱり よっこらしよ。4 けれども、やっぱり2、  
 それでも、ひっぱり よっこらしよ。よっこらしよ、それ もう ひとつ よっこらしよ。1 とう  
 とう 1  
 ごくま社 すると、そこで6、けれども、それでも4、ひっぱり ひっぱり ひっぱり、ひっぱ  
 りました。2 ひっぱり ひっぱり ひっぱり、ひっぱり、ひっぱりました。2 ひっぱり  
 ひっぱり ひっぱり、ひっぱり、ひっぱり、ひっぱり、ひっぱりました。1 ひっぱり ひっぱり  
 ひっぱり、ひっぱり、ひっぱり、ひっぱり、ひっぱり、1 とうとう  
 福音館書店 うんとこしよ どっこいしょ 6、ところが、それでも2、まだ まだ1、まだ まだ  
 まだ まだ 1、やっと1  
 フレーベル館 ところが、「それひけ よいこらしよ! やれひけ どっこいしょ!」6、(略)ひっぱ  
 ったのですが、どうにも、それでも、やっぱり3、とうとう1  
 ブロンズ社(英語訳からの翻訳なのか、登場の動物が増えている)そして3、けれども、(略)さあ  
 力をいれて! それっ うんとこしよ!あ どっこいしょ!」じめんにあしをふんばると8、ぐいぐ  
 いと1、びくとも8、ぐいぐいぐいと7、力いっぱい7、「うんとこしよ!あ どっこいしょ!」  
 5、すると2、「うんとこしよ!あ それ どっこいしょ!」2、「うんとこしよ!あ そーれ どっこ  
 いしょ!1、ばひょーんん!1、なんと..のです。1  
 (その他:おばあさんは わたしにまかせなさいと、12の力をあわせても、など)  
 ミキハウス よいしょ うんしょ。1、あれ(略)なかなか ぬけないぞ。ハラヨー エンコーラヤーシ  
 ョ。1、ソラヨー エンコーラショー。1、なかなか1、ハラヨー エンコーラヤーシ ョ ソラヨー エン  
 コラショー。4、それでも1、でも1、やっぱり1、どうしても((略)ぬけません。)1、やっと1

注4) ロシア語では擬態・擬音を意味する動詞も少なくない。例えば、ドアを音を立てて乱暴に閉めた人  
 に向かって、 ! ドアをボタンと閉めないで! 雨がしとしと降っ

ている、など。 で使われている個々の動詞は、特に擬態、擬音語というわけではないが、動詞と動詞のリズミカルな反復や過去の動作を未来形にするなどの相互関係から、擬態、擬音効果が出ているものと思われる。

注5) を、翻訳において「...彼女は殺しはしなかったし、窓からほ  
うり出したりはしなかった」とシタ形の否定で訳している場合があるが、不完了アスペクト過去形の  
“過去の事実の否定”の意味は、「殺してはいないし、..ほうり出したりもしていない。」というシテイナ  
イ形とすべきかは、判断の分かれるところである。小論では、一般的に、動作事実における“過去の経  
験”の否定の意味では、後者が基本であるとする。

注6) アスペクトの訳出が訳者によって異なるその他の例として、例えば、 トルストイ『戦争と平和』  
2巻第一章冒頭 1806 は、下記の  
ようになっている。これは、アスペクトの部分的統括に対する訳者の判断評価（モダリティ）の差を一  
面で示している（参照：樫尾 2000）。

1972 中村白葉 「...帰国した。....」（河出書房新社『トルストイ全集4』）

1972 中村 融 「...帰国した。....」（筑摩書房『筑摩世界文学大系42』）

1984 米川正夫 「...帰国した。....」（岩波書店『岩波文庫 戦争と平和』）

1990 工藤精一郎 「家へ帰ることになった。....」（新潮社『戦争と平和』）

注7) は、成句ではないが、ロシア語では対立概念として一般的なもの  
であり、ロシア語母語者はさまざまの比喻に用いる。例えば、人の誕生は であるが、人生は  
複雑で意外性に富む、つまり だとか、（仕組みが凝っている器具やおもちゃの説明で）ごく  
あり触れた形状だが、からくりおもちゃだ、等。従って、ロシア語母語者にとってこの題名は、読む前  
にある程度書き手の意図が予測可能なものと言える。

注8) 田村（2002）は、『雪国』の翻訳では、原文の「詩の文体」理解の差に拠るロシア語訳の誤訳の可  
能性を指摘している。

#### 【参考文献】

- 磯谷孝 1977.『演習ロシア語動詞の体』. 吾妻書房  
小沼文彦 1980.『ドストエフスキー全集 第12巻 第13巻』. 筑摩書房  
樫尾頌子 1998. ロシア語テキストにおけるアスペクト機能.『高崎経済大学論集第41巻第1号』  
樫尾頌子 2000. ロシア語アスペクトのテキスト機能.『高崎経済大学論集第42巻第4号』  
佐久間まゆみ 1995. 中心文の「段」統括機能.『日本女子大学文学部紀要』44  
佐久間まゆみ（研究代表者）. 2000『日本語の文章・談話における「段」の構造と機能』平成9年度～11  
年度科学研究費補助金基礎研究（C）（2）研究成果報告書  
佐久間まゆみ 2002. 接続詞・指示詞と文連鎖.『複文と談話』日本語の文法4.【仁田義雄・益岡隆志編  
集】岩波書店  
佐藤純一 1982. ロシア語.『講座日本語 外国語との対照』. 明治書院  
田村充正 2002.『「雪国」は小説なのか』. 中央公論事業出版  
原求作 1996.『ロシア語の体の用法』. 水声社  
三谷恵子 2001. ロシア語の『体』の研究史.『「た」の言語学』. ひつじ書房  
邑本俊亮 2001. 文章の要約. 森敏昭編著『おもしろ言語のラボラトリー』. 北大路書房  
/ . 1982 .  
(アカデミア文法82)  
. . . 2001  
. 1999 .  
. 1996 .  
. 1988  
. 1968 .

【資料出典】

- 内田莉紗子訳、おおきなかぶ、1962、福音館こどものとも傑作集  
金光せつ訳、大きなかぶ、1989、偕成社、世界の童話  
こぐま社編集部訳、おおきな おおきな おおきな かぶ、1991、こぐま社  
文・田島征三、おおきなかぶ、1988、株式会社ミキハウス  
中井貴恵訳、おおきな かぶ、1999、(株)ブロンズ新社  
文、松谷さやか、おおきな かぶ、1996、ロシアの昔話より、世界名作えほんライブラリ  
、1992  
、1876、  
、ドストエフスキー全集 第23巻  
(作家の日記)1876、  
、1981  
、1975、



